武蔵野ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を楽しみながら学ぶ

―むさしの文學館　#2―

新田次郎（にったじろう）

武蔵野市ゆかりの文学者たちの人生、作品世界、市との関わりなどを紹介します。

無線電信講習所（現在の電気通信大学）を卒業後、中央気象台に就職。雨量計の開発で運輸大臣賞も受賞した、優秀な技術者でもあった（撮影／市川一雄）。

富士山を望める吉祥寺の土地を購入

作家、新田次郎氏が吉祥寺に土地を購入したのは昭和27年のこと。雑誌『サンデー毎日』の懸賞小説に入選し、妻である藤原てい氏の著書『流れる星は生きている』がベストセラーとなった時期であり、当時勤めていた中央気象台（後の気象庁）の官舎から移り住みました。

長男である藤原正広氏によると、当時の吉祥寺は家もまだ少なく、麦畑が広がる起伏のある土地でしたが、そこから富士山を眺めることができる点を新田氏は大層気に入っていたそうです。富士山はデビュー作『強力伝』の舞台であり、小説『富士山頂』では、自身をモデルとする主人公が、2階の書斎から双眼鏡で富士山を眺める姿を描いています。富士山観測所に勤め、富士気象レーダーを建設するという重責を成し遂げた新田氏にとって、富士山は特別な存在だったのでしょう。

気象台の技術者と作家二足のわらじを履く生活

ベストセラー作家として知られる新田次郎氏ですが、作家としてのデビューは39歳と遅咲き。その後も54歳で気象庁を退職するまで、気象台勤務と作家活動の二足のわらじを履き続けました。

小説を書くきっかけは、妻の作家活動に刺激されたためと言われていますが、技術者として活躍した新田氏らしく、その作風は緻密。テーマを絞り、膨大な下調べを基にした骨太な作品を得意としていました。小説を書き出す際、綿密な「小説構成表」を必ず作っていたというのも、技術者であった新田氏らしいエピソードです。原稿の締め切りを必ず守ることでも知られており、編集者と約束した30分前には、既に身支度を済ませて応接間で待機していたそうです。

同じく武蔵野市に住んでいた作家、丹羽文雄氏とも縁が深く、『サンデー毎日』の懸賞小説で選者を務めていた丹羽氏の元に通い、丹羽氏が主宰する同人誌『文学者』にも参加していました。初めて同誌に投稿した作品の評価を「木端微塵（こっぱみじん）に叩かれた」と、『小説に書けなかった自伝』で記しています。

昭和31年には『強力伝』で第34回直木賞を受賞。その後も精力的に作品を発表し、順風満帆な作家活動を

来歴

明治45年	長野県上諏訪町（現在の諏訪市）大字上諏訪字角間新田に生まれる。本名藤原寛人。新田の次男坊だったので、のちにペンネームを新田次郎とした。
昭和5年	無線電信講習所本科（現在の電気通信大学）へ入学。
昭和7年	中央気象台（現在の気象庁）に就職。
昭和14年	両角ていと結婚。
昭和24年	妻ていが、満州からの引き揚げの記録を記した『流れる星は生きている』を刊行。後にベストセラーとなる。
昭和26年	『強力伝』を「サンデー毎日第四十一回大衆文芸」に応募。現代の部一等に入選。
昭和27年	神田の官舎から武蔵野市吉祥寺北町に転居。
昭和31年	『強力伝』によって第34回直木賞を受賞。
昭和41年	気象庁を退職。作家生活一本に絞り、さらに旺盛な作家活動を行う。
昭和54年	紫綬褒章を受章。
昭和55年	心筋梗塞のため吉祥寺の自宅にて急逝。享年67歳。

増築した2階の八畳間を書斎としていた。晴れた日はこの書斎の窓から、富士山の姿を眺めることができたという（写真提供／朝日新聞社）。

妻、藤原てい氏。満州からの壮絶な引き上げ体験を記した『流れる星は生きている』がベストセラーとなる。昭和47年から平成4年まで武蔵野市教育委員も務めた。

送っていたかのように見えますが、小説一本に絞る自信は「全くなかった」と語っており、気象台の仕事を辞めるまでにはかなりの葛藤があったようです。夕方5時に仕事を終えた後、帰宅して11時までが作家活動の時間。夕食を済ませてから2階の書斎への階段を上る時、「戦いだ、戦いだ」とつぶやくのが毎日の習慣でした。作家として「なんとかやれるという確信のようなものを得た」（『小説に書けなかった自伝』より）のは、小説を書き出してから16年の年月がたっていました。

昭和41年に気象庁を退職。その後書き下ろし長編『火の島』や『富士山頂』、『槍ヶ岳開山』などを発表しました。昭和46年に発表された『八甲田山死の彷徨』がベストセラーとなり、昭和49年には『武田信玄』、ならびに一連の山岳小説に対して」第8回吉川英治文学賞を受賞。次第に短編が減り、長編小説主体の仕事に変わっていきます。「いいものが書きたい、オレが死んでも残るようなものを書きたい、出来るだけ長篇（へん）を書きたい」というのが口癖で（『わが夫新田次郎』より）、精魂を傾ける創作活動に、妻ていは体を壊さないかと随分心を痛めていたようです。

創作活動の日々を癒やす善福寺公園までの散歩道

気象庁を退職後、小説を書くことに根を詰め過ぎ、運動不足になりがちだったため、1時間ほどかけて散歩するのが毎日の習慣となっていました。自宅から善福寺公園（杉並区善福寺二・三丁目）まで、約5kmにわたるコースを、雨が降っても雪が降っても歩いていたとか。『小説に書けなかった自伝』では、周囲を何度も散策し、時間をかけて決めたというその散歩コースが詳細に記されています。

「武蔵野吉祥寺北町一丁目の私の家から出て、吉祥寺東町に出る。法政高校のグラウンドのあたりから、練馬区関町一丁目に入り、直ぐ杉並区善福寺町を通って、善福寺公園に入る。池を一周するだけで約一キロメートルある。帰途は関町一丁目を青梅街道の近くまで歩いたところで、練馬区立野町に足を踏み入れ、吉祥寺北町の自宅へと回帰するのである」

毎日歩き、どの家にどんな花が咲くかもすべて把握していたという新田氏。多忙のため趣味の登山があまりできなかった彼にとって、この散歩道を歩く時間が、心休まる貴重なひとときだったようです。

新田次郎記念室（長野県諏訪市）

数々の名作の舞台裏に迫る

諏訪市図書館の2階にある新田次郎記念室。蔵書を中心に遺品などを常設展示（閲覧も可能）。書斎の復元コーナーもあり。

所在地：長野県諏訪市湖岸通り5-12-18 諏訪市図書館内
利用時間：9時30分（土・日曜、祝日10時）～7時（水・木曜6時30分まで、土・日曜、祝日6時まで）
休館日：月曜、蔵書整理期間、年末年始

新田次郎に触れるこの2冊

『武田信玄』

NHK大河ドラマの原作にもなった歴史小説。天下統一を夢見た武田信玄の一生を、雄大な構想で描き出す（文春文庫）。

『八甲田山死の彷徨』

199名の死者を出し、山岳史上最大とも言われる遭難事故を題材として、ベストセラーとなり、映画『八甲田山』（1977年）の原作でもある山岳小説（新潮文庫）。

取材・文／藤城明子（ポルタ）　参考文献／新田次郎『小説に書けなかった自伝』（新潮文庫）、藤原てい『わが夫 新田次郎』（新潮社）、新田次郎記念会編『新田次郎文学事典』（新人物往来社）、田村 栄『新田次郎』（清山社）ほか